



キリスト者として生きる

現代社会の座標軸をもとめて

第3回

森本あんり

もりもと あんり
国際基督教大学教授

わたしたちを最後に動かすもの

ローマ教皇ヨハネ・パウロ二世が亡くなりました。このコラムがみなさんのお手元に届く頃には、もう新しい教皇が決まっていることでしょう。どんな新教皇が選ばれるにせよ、ヨハネ・パウロ二世は、現代世界に大きな足跡を遺した偉大な教皇として記憶されることと思います。その在位期間は、歴代二六四人の教皇の中でも三人目に長かったようですが（ただし一位はペトロとか）、在位二六年の間には、東西冷戦の終結をはじめとするいく

つもの歴史的な出来事がありました。

教皇は、ご自身がかつてナチス・ドイツの占領下で地下組織の神学校に学んだこともあり、何にもまして世界の人々の平和と和解に努力した方でした。戒厳令下の母国ポーランドを再訪し、弾圧されていた自主労働組織「連帯」を支持して、ソ連に不介入を要請します。その時の「モラルの勝利になるだろう」という励ましの言葉に支えられて、やがて非共産主義政権が誕生、それがベルリンの壁崩壊へとつながり、ついに八九年の東西両首脳によるマルタ会談で冷戦の終結が宣言されたのです。

「ライサ、この方が世界至上の道徳の権威だ」——マルタ会談の前日、ゴルバチョフ氏はそう言ってヨハネ・パウロ二世を妻に紹介したといいます。無神論を国是としていたソ連の共産党書記長ですが、その言葉には皮肉ではなく掛け値なしの敬意が込められていた

と思います。

この世の中、結局は力と金だ、と言う人があります。政治は早い話が軍隊と経済だ、というのが現実主義者の達観です。しかし二十世紀の世界は、そのどちらももたない道徳と信念の力が、巨大なシステムを内側から崩壊に至らしめた、という事実を目撃しました。

たしかに、わたしたちの日常生活の大部分は、現実的な利害関心に左右されています。しかし、日常を越えて歴史が大きな転換点を迎えるとき、人はそれだけでは動きません。そのときわたしたちを動かすのは、心の奥深くに響く精神の呼び声です。それを信仰と呼ぼうと、あるいは思想や理念と呼ぼうと、さほど大きな違いはありません。

このことは、世界や国々の歴史にも、またわたしたち一人一人の人生にも、あてはまるように思います。わたしたちはみな、たいていは損得勘定で暮らしています。けれども、

わたしたちの日常生活の大部分は、

現実的な利害関心に左右されています。しかし、

日常を越えて歴史が大きな転換点を迎えるとき、

人はそれだけでは動きません。そのときわたしたちを

動かすのは、心の奥深くに響く精神の呼び声です。

先ごろ亡くなったローマ教皇ヨハネ・パウロ二世は、

この声を聞き続けた人であつたと思うのです。

人生に三度あるかないかという「ここ一番」

の大きな決断をしなければならぬとき、わたしたちは損得だけで動くことはありません。

どんなに損をしても、このことだけは譲ることができない、それを失ってしまったら、

自分は永久に自分でいることができなくなってしまう——そういう何かが、わたしたちの究極の行動を決定するのです。

それは、自分がいつも鼻の先にぶら下げている主義主張と同じであるとは限りません。

もう少し奥深いところで、つまり自分と神さまとの間だけで決められていて、それ以外の誰も足を踏み入れることのできないもの。そういう心の確信が、各人に固有の人格を形づくっているのではないかと思います。

おそらく、ヨハネ・パウロ二世自身にも、

そのような確信があつたのでしよう。そのはたらきには、教会の歴史を大きく転換させる

ような改革もありました。英国教会やプロテスタント教会との交流ばかりでなく、一〇〇

〇年に近い分裂後始めて正教会との対話を開始し、ガリレオ裁判や十字軍遠征、それに

ユダヤ人迫害に加担した教会の過ちを認めて謝罪しました。なかには、国際債務免除運動

やイラク戦争回避の外交交渉のように、目に見える成果を生まなかつたものもあります。

逆に、避妊や妊娠中絶、同性愛、女性司祭などの問題では、従来の立場を変えず、世界中

で非難と失望の声が聞かれました。

教皇は、成果があろうとなかろうと、保守

であろうと改革であろうと、非難されようと賞賛されようと、ただみずからの信念に基づいて揺らぐことなく、これらの「なすべきこと」をなしていったのだらうと思います。「使命に生きる」というのは、そういうことなのでしよう。

あるいは、このような見方はナイーヴにすぎるともいわれます。共産圏の崩壊だって、たまたま制度の疲弊が限界に達してただけだ、という見方もできます。いやむしろ教皇こそ、カトリック教会という地上最大の組織の頂点に立つ絶対権力者ではないか、と口をとがらす人もあるでしょう。プロテスタントの信仰からすれば、権力には墮落がつきものです。しかしこの教皇は、教派や信仰のいかんにかかわらず、教会の内でも外でも人々に慕われていました。若者の教会離れがささやかれる中、数知れない若者たちがこの一人の老人の死を悼んで集まったのは、いったいどうしてでしょうか。

教会という制度を批判し、すべて組織というものの墮落をあげつらうことは簡単です。

けれども、あらゆる人間的な墮落と腐敗と失敗にもかかわらず、この世の教会がなお神の恵みの器とされ、みわざの担い手とされることもある——わたしはそういう徴を、ヨハネ・パウロ二世という一人の神の僕に見たいのです。